

# 鑑真

688年〜763年。

唐・揚州生まれ。

中国・唐の僧侶。唐招提寺を建立。



中国の唐・揚州に生まれた鑑真和上は、14歳で出家した後、洛陽・長安で修業を積み、713年に故郷に戻って江南第一の名僧と称されました。その頃、日本からは朝廷の命を受けた2人の僧、栄叡と普照が、伝戒の師を求めて唐を訪れていました。

742年、2人は和上の元を訪れて、日本に渡り戒律を伝えてくれる人物を探しましたが誰も名乗りを上げません。そこで、不惜身命の思いに燃えた和上自らが弟子を率いて渡航を決意したのでした。

しかし、当時の日本への船旅は命がけです。和上を思う弟子の中には出国を妨害するものもあり、また嵐などによる遭難は5回を重ね、日本に到着するまでなんと12年もの歳月を要しました。しかも、その間に和上は何人も弟子たちを亡くし、自身も失明するという大きな代償を払ったのでした。

753年、6回目によく日本に到着した和上を聖武上皇は喜んで迎え、授戒伝律の権限を委任し、さっそく東大寺大仏の前で和上から受戒されました。和上は東大寺で5年を過ごした後、新田部親王の旧居を寺としました。それが唐招提寺です。

唐招提寺の御影堂には、国宝鑑真和上坐像があります。そのお姿は、強い意志と私たちを見守るやさしさに満ちています。苦難の中でも不屈の精神を持ち続けた和上の生き方は、今も大きな感動を伝えていきます。

# 唐招提寺

よみがえった天平の響、唐大和上・鑑真の遺志をいまに受け継ぐ戒律の寺。

唐招提寺の金堂や講堂、経蔵、宝蔵は奈良時代の様式を伝え、多くの寺と異なり一度も兵火に遭わず、今も天平の昔を彷彿とさせます。

平成の大修理を終えた金堂には、本尊の盧舎那仏坐像を中心に千手観音立像、薬師如来立像と、守護神の梵天・帝釈天・四天王立像が安置されています。御影堂の襖絵は、東山魁夷が奉納したもので、厨子に祀られた鑑真和上坐像とともに、6月6日の開山忌と前後日を含めた3日間に限り開扉されます。

旧開山堂の前に建つのは、鑑真を偲んだ松尾芭蕉の「若葉して御目の雲拭はばや」の句碑。開山廟前には、和上の故郷・揚州から贈られた瓊花が植えられています。

境内西側には和上が戒めを受けた「戒壇」が、おごそかに佇んでいます。



■所在地  
〒630-8032 奈良市五条町13-46  
TEL.0742-33-7900  
■交通  
近鉄西ノ京駅から徒歩700m  
駐車場有(150台・有料)

# 村田珠光

1423年〜1502年。  
奈良生まれ。  
室町中期の茶人。侘び茶の開祖。



知られる人物です。

室町時代に流行った上流社会の作法である茶の湯に対して、侘び茶は禅の精神を追求する、精神世界の深み漂う作法です。ク「一休さん」でおなじみの一休宗純と親交があり、一休和尚から「園悟克勤」の墨蹟を与えられました。珠光と珠光の茶の湯に禅的な背景が見られるのは、そうした理由からです。

また、第一の弟子古市澄胤ふるいちしょういんに与えた「心の文」には、「和漢の境を紛らかすこと」という言葉を用いています。これは、それまでの唐物中心だった茶の湯の道具に、国産の和物をどう調和させて美を創るかということを示していました。また、「月も雲間のなきは嫌にて候まごころ」という文章からは、満月よりも雲間に見え隠れする月に美しさを見出し出していることが伺えます。確立された珠光独自の美の世界が、侘び茶の世界観を創りだしているのです。

称名寺は2度の火事で全焼し、現存する建物は1802年に復興されたものです。落ち着いた佇まいの茶室は、珠光の侘びの精神世界を表し、現代にその質素ながらも美しい姿を伝えています。

# 称名寺



わび茶の祖・珠光を偲ぶ、奈良市街の静かな住宅地にある隠れ寺。

称名寺は興福寺の学僧であった専英せんえい、琳英りんえいが常行念仏の道場として、鎌倉時代に創始したと伝えられています。興福寺の北に位置し、興北寺と呼ばれていましたが、室町時代に現在の場所に移されました。

本尊阿弥陀如来立像(秘仏)は、平安後期の定朝様式を伝えた親しみやすい姿。また地藏菩薩立像(奈良国立博物館寄託)は平安時代作と伝わる松材一木造りです。境内の千体地藏群は、戦国武将・松永久秀が多聞城を築城する際に使われた石仏群で、その数およそ1900体。廃城の際に散逸した石仏を観阿上人かんのあしやうじんが集めたといわれています。

「独廬庵どくろあん」は、広さを変えられる趣向を凝らした茶室となっています。毎年5月15日の珠光の命日には珠光忌法要が営まれ、本堂や本尊、「独廬庵」が特別に公開されます。



■所在地  
〒630-8254 奈良市菟蒲池町7  
TEL.0742-23-4438  
■交通  
近鉄奈良駅から徒歩400m、  
JR奈良駅から徒歩800m  
駐車場有(5台・無料)

# 柳生宗厳



1529年～1606年。  
大和国添上郡（現・奈良市）生まれ。  
戦国末期の兵法家。柳生新陰流の祖。

柳生宗厳は幼い頃から武技に才能を発揮し、はじめは神道流を修めました。

1563年に奈良宝蔵院で関東一といわれる新陰流の創始者上泉伊勢守信綱かみいずみでいせのかみのぶつなと会い、その技に感銘を受けて入門。たちまち腕を磨いて2年後には新陰流の印可状を授かり、柳生

新陰流がはじまります。当時、多くの諸大名が宗厳の門弟となりました。しかし、松永久秀軍に参加した際に宗厳は負傷し、さらには長男が辰市の闘いで重傷を負ってしまいました。1577年に信長に攻められた久秀が信貴山城しんきやまで自刃して果てると、その後は、石舟斎宗厳せきぶさいと号して柳生谷に隠退し、新陰流の道に精進しました。

1594年には五男柳生宗矩むねのりを率いて、京都で徳川家康に新陰流兵法を披露したことも伝えられています。その後の関ヶ原の戦では家康軍につき、旧柳生領に500石を賜りました。一族には柳生十兵衛など、歴史に名を残す剣豪を輩出しています。

柳生新陰流では、古くから剣術ではなく兵法という言葉を用いますが、それは単なる斬り合いの技術ではなく天下を治めるための術を指してきたからです。宗厳は「無刀の工夫」である技法と、「心の道の付け事」の心法、この両面の確立を生涯かけて目指しました。

奈良市の芳徳禅寺は、亡き父石舟斎宗厳の供養のために、柳生宗矩が創建しました。寺からは、修業の地である自然豊かな柳生の里が一望できます。

# 芳徳禅寺

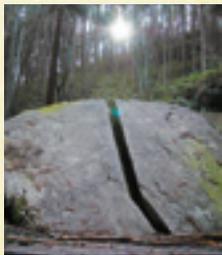


名だたる剣豪を輩出した柳生一族、その歴史と伝説をいまに語る菩提寺。

芳徳禅寺は、柳生宗矩と親交のあった沢庵禅師たくえんによつて開山。以来、柳生家代々の菩提寺となりました。本堂裏手の歴代墓所には80基あまりの石塔が並んでいます。

1711年の大火で堂宇は全焼、廃藩後は荒廃し一時は無住ともなりましたが、1911年に一族の末裔柳生基夫もとお（元台湾銀行頭取）が多額の資金提供により復興、昭和に入つて橋本定芳じやうほうが寺域、建物を整備しました。寺の下には、柳生十兵衛が一人の弟子を鍛えたという正木坂道場を受け継ぐ剣道場があり、座禅と剣道を一体化させた指導が行われています。

芳徳禅寺の東の天乃石立神社あまのいわたてには、剣の修行に励む宗厳が天狗と見紛つて伐つたという一刃石が「刀傷」も鮮やかに残っています。



■所在地  
〒630-1231 奈良市柳生下町445  
TEL.0742-94-0204  
■交通  
JR・近鉄奈良駅から柳生・邑地中村行きバスで約50分、柳生下車、徒歩500m  
駐車場有(40台・有料)



# 行基



堺市博物館蔵

668年〜749年。  
和泉国（現・大阪府）生まれ。奈良時代の僧。  
社会事業に尽力した法相宗の祖。

行基は今の大阪府、和泉で生まれました。父は、百濟から渡来した和邇の子孫にあたる高志才智です。15歳で出家し、道昭などに法相宗を学び、民間への布教に努めました。各地をまわって説教を行う際に、人々のために橋を架けたり、池を掘ったり、道をつくるなどの土木工事を行って社会事業に奉仕したことで知られており、関西には行基の手による橋やため池、堤などが多数残されています。行基を慕う民衆千人もが、彼の後について歩いたという言い伝えもあるほど人々の心を強くとらえた行基は、民を惑わす者として罰せられた不遇の時期もありましたが、やがて行基菩薩と呼ばれるまでになります。

その後、行基の絶大な民衆への影響力を知った聖武天皇は、東大寺造営に際して彼を勧進に起用しました。弟子と協力して各地を説法して回り、人々から寄付を受けて勧進活動に努めた行基は、功績が認められて745年に大僧正に任命されます。大僧正は、仏教界の最高位にあたります。行基が初めてその位に任ぜられたことから、聖武天皇の尊信の深さが伺えます。

大仏造営に大きな貢献をした行基ですが、その完成の3年前に菅原寺で亡くなってしまいます。行基は、本願の聖武天皇、開山の良弁、開眼の導師の菩提僊那と並び、東大寺創建に力を尽くした4聖と呼ばれています。

# 東大寺



聖武天皇が創建、数々の困難を乗り越えていまに残る壮大な伽藍。

奈良といえはすぐに思い浮かぶのが大仏様、そして東大寺。日本人の誰もが知るこの寺は、聖武天皇の発願により建立された官大寺です。創建当初、今よりひと回り大きな大仏殿が建ち、七重塔がそびえ立っていたといえます。元々、本尊毘盧遮那仏（大仏）の造立は紫香樂宮で始められましたが、平城遷都にともない奈良の現在の地で再開され、752年に開眼供養が行われました。

平安末には平家の南都焼討、戦国時代には三好・松永の乱の兵火に罹りました。しかし鎌倉期の重源上人や江戸期の公慶上人などの活躍により再興を果たし、今日の姿を取り戻しました。現在の南大門や大仏殿はこのときの復興によって築かれたものです。法華堂をはじめ境内諸堂には素晴らしい数々の仏像が祀られ人々を魅了しています。



■所在地  
〒630-8587 奈良市雑司町  
406-1 TEL.0742-22-5511

■交通  
JR・近鉄奈良駅から市内循環バスで約5分、大仏殿春日大社前下車、徒歩すぐ  
駐車場無（近隣県営駐車場250台・有料）

# 小堀遠州

1579年〜1647年。  
近江坂田郡小堀村現・滋賀県長浜市生まれ。  
江戸初期の大名茶人。



小堀遠州顕彰会蔵

近江生まれの遠州は、大和郡山城主となつた豊臣秀長に仕える父に伴い、7歳の時に大和郡山に移り住みます。当時の大和郡山は秀長によつて商人たちが城下町に集められて賑わいを見せていました。そんなある日、10歳の遠州は郡山城内で千利休が秀長に点前の指導をしている姿を見る機会があり、それが茶の道に入るきっかけとなつて、千利休の弟子の古田織部ふるたおりべについて本格的に茶道をはじめました。

遠州流の茶道は、くさされい「綺麗さび」と呼ばれます。千利休のくわ「侘びさび」の精神世界に対して、美しさや明るさ、豊かさを表現した客観性の美、調和の美の世界を追求しています。さらに、茶の湯の心として、思いやりの心を重視した作法で、時代と共に発展していきました。

また、28歳のときに作事奉行に命じられてからは、桂離宮、二条城、江戸城、南禅寺金地院など、築城、建築、作庭の分野においても美的センスを生かして多くの作品を残します。遠州が創つたそのどれもが、古びれることなく、洗練された美意識を現代に伝えていきます。奈良市の尼寺の一つ興福院も遠州が作事を手掛けた、佇まいの美しい寺です。

遠州は多分野で才能を発揮し、日本を代表する総合芸術家として語られ、日本のレオナルド・ダヴィンチとも言われています。

# 興福院

佐保山の山懐にいだかれた  
四季の移ろいも美しい尼寺。



奈良で最も美しい尼寺の一つと言われ、和氣清麻呂わけのきよまろが創建したとも、藤原百川ももかわ創建の興福尼院が前身とも言われています。創建当時は現近鉄尼ヶ辻駅付近にあつたと伝えられています。尼寺になつたのは、戦国時代後期であつたようです。中世以降衰退していましたが、小堀遠州の援助を受け、興福院と名を改めました。

その後、江戸初期に佐保山の南、法蓮町ほうれんちょうの地に移築されています。本堂、書院、山門も遠州が手がけたものとして知られています。また、庭園は遠州の弟子が手がけたものと考えられています。

遠州の美意識は確かに受け継がれています。小堀遠州を流祖とする、武家茶道「遠州流茶道」宗家は、現在も興福院で稽古を行っています。



■所在地  
〒630-8113 奈良市法蓮町881  
TEL.0742-22-2690

■交通  
JR・近鉄奈良駅から航空自衛隊西大寺駅行きバスで約9分、佐保小学校前下車、徒歩300m  
駐車場有(8台・無料)  
拝観は要予約

# 会津八一



新潟市会津八一記念館蔵

1881年〜1956年。  
新潟町（現・新潟市）生まれ。  
歌人、書家、美術史家。

会津八一は歌人、書家、美術史家として知られています。彼が独学でマスターしたといわれる美術史学の研究は、確かな審美眼と鑑識眼に裏付けられたものです。学生時代に奈良美術と出会い、新潟県での英語教師時代の1908年に初めて奈良を訪問。その後上京、早稲田中学の英語教師を経て、美術史学の研究が認められ、早稲田大学文学部講師となります。

奈良の魅力と本質に触れた会津は、上京してから頻繁に奈良を訪れるようになっていきました。その際の定宿は、かつて奈良国立博物館に面して建っていた旅館「日吉館」。会津をはじめ、志賀直哉や和辻哲郎ら文化人の交流の場ともなっていた旅館です。現在は取り壊されてしまいました。旅館の看板は会津揮毫によるものでした。奈良美術の研究の傍ら、盛んに短歌で奈良の風景や仏像の美しさを表現した会津。現在、奈良県内には自筆歌碑が15基建てられています。生家のある新潟県内の歌碑は13基といえますから、奈良への深い思いを伺い知ることができます。古くから筆や墨を伝統的につづけてきた奈良は、書家でもある会津にとって非常に居心地のよい場所だったのではないのでしょうか。彼の作品を通して奈良のすばらしさに改めて気付けられます。

# 秋篠寺



多くの文人を魅了し愛された、東洋のミューズが待つ寺。

秋篠寺は奈良時代後期、光仁天皇の勅願によって建立されたと伝えられます。ここには美しい姿の伎芸天像があります。頭部は天平時代そのままの乾漆造で、体は木彫りという極めて異例のようですが、外観からは気付かぬほど、自然で調和に満ちた像になっています。そのためか、堀辰雄によつて「東洋のミューズ」と絶賛されました。たかむらにさしいるかげもうらさびしほとけいままぬあきののさと（竹群にさし入る光もうら淋しいままぬ秋篠の里）

会津八一が訪ねたとき、廃仏毀釈のため秋篠寺は荒廃して、仏たちは博物館に預けられていました。そのため「仏いままぬ…」と短歌を詠んだようです。美しい東洋のミューズは、創建時の遺構を残す本堂で、今は訪れる人々を待っています。



■所在地  
〒631-0811 奈良市秋篠町757  
TEL.0742-45-4600  
■交通  
近鉄大和西大寺駅から押熊行きバスで約6分、秋篠寺下車、徒歩すぐ  
駐車場有（12台・無料）

# 藤原不比等

658 / 659年〜720年。  
飛鳥・奈良時代の政治家。  
大宝律令制定を主導。平城遷都を実現。



談山神社蔵

ます。

父の死後、家を継いだ不比等は大納言、右大臣を歴任し、藤原氏繁栄の基礎を築きました。大宝律令の制定に努め、710年の平城遷都の際にも遷都を推進する活躍をおさめました。その際に氏寺をたかいち高市郡から現在地に移転させて、興福寺と改称しました。

政界において不比等は右大臣にまで出世。さらに娘たちを皇家へ嫁がせて関係を密接にしていきました。聖武天皇の后である光明皇后（光明子）は、不比等の三女です。正倉院宝物の「楽毅論」には、光明皇后の署名「藤三娘」があります。不比等の三女を意味するサインには、父娘の絆を感じます。また、不比等の旧邸宅を総国分尼寺の法華寺としたのも光明皇后です。

2006年、平城宮の東側にある門跡付近から「右大殿荷八」と書かれた木簡が出土されました。これは当時右大臣だった不比等邸へ荷物を運ぶ際に使われた荷札と考えられることから、不比等邸が平城京の東側にあったことが裏付けられました。謎が多い不比等ですが、調査が進めばいつかその姿が明らかになるでしょう。

# 興福寺

猿沢池の柳越しに仰ぐ五重塔、藤原氏の氏寺として栄えた南都を代表する名刹。



興福寺は、天智天皇の世に滋賀県の大津に都があったころ、山階の地（現在の京都市山科）に造営されたのが始まりです。

興福寺に行けば、この土地が平城宮を見下ろす一等地に建てられたことがわかり、藤原氏の権力の大きさを想像させます。興福寺は特に藤原北家とのつながりが強く、藤原北家隆盛とともに、寺も発展してきました。その勢いは、大和のみならず、全土へ広がっています。平安時代、春日のご神木を担いで強訴を行ったり、しばしば延暦寺とも対立していました。

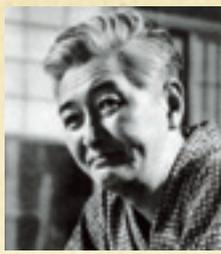
時代は流れ、明治の廃仏毀釈の嵐の中、一時は寺の勢いも衰えましたが、その後再興が進められ、現在は中金堂の再建が行われています。阿修羅像などの多くの国宝を持つ世界遺産の寺です。



■所在地  
〒630-8213 奈良市登大路町48  
TEL.0742-22-7755

■交通  
近鉄奈良駅から徒歩100m  
駐車場無  
(近隣県営駐車場250台・有料)

# 亀井勝一郎



(財)日本近代文学館蔵

1907年〜1966年。  
北海道函館市生まれ。  
評論家、『大和古寺風物誌』の作者。

1943年に刊行された『大和古寺風物誌』は、評論家亀井勝一郎の仏教や美術に対する知識と心情が描かれています。斑鳩宮から始まり、法隆寺、中宮寺、法輪寺、薬師寺、唐招提寺など大和の古寺を訪ねます。

北海道函館市に生まれた亀井は、東京帝国大学美術科へ入学するものの労働運動に参加、その後大学を自主退学してしまいます。1928年、治安維持法違反容疑で逮捕され、獄中へ。出所後は政治活動から転向して評論家として再出発します。

日本の古美術、古典、仏教などへの関心を深めていったのは、この頃からだといわれています。初めて訪れた奈良で、寺や仏像、自然の風景などに出会い、深い感銘を受けたことが転向のきっかけでもありました。当時奈良に住んでいた志賀直哉を慕って彼のサロンに集い、熱く語り合った文化人たちのなかには亀井もいたのです。

『大和古寺風物誌』で印象的なのは、薬師寺について、仏像はもとより、その後ろにある金堂の壁の荒廃ぶりに亀井が触れている点です。そして、それもまた奈良らしさにあふれていてよいとしているところが、彼ならではの「大和の美への解釈」です。本書は日本人の心を再発見する名著として、今も多くの人に読まれています。

# 薬師寺



白鳳の、凍れる音楽。東塔と、再興された伽藍が並び建つ天武天皇の勅願寺。

薬師寺の創建は、天武天皇が妻である皇后(後の持統天皇)の病氣平癒を祈願して発願されたことに遡ります。建立途中で天武天皇が亡くなったため、その遺志は持統天皇に受け継がれました。藤原京の地に建立された寺は平城遷都とともに奈良に移りましたが、長い歳月の間に自然の猛威や兵火にさらされ、一時は大変荒果れてしまいました。しかし現在、写経勧進によって白鳳伽藍が次々と再興され、金堂薬師三尊像や大講堂の弥勒三尊像は美しい輝きを放っています。

フェノロサが凍れる音楽と評し、亀井が「夕暮から夜へかけての塔の姿がみたかった」と記した東塔。その水煙には、音楽を奏でる飛天たちの姿があります。浮き雲を引き連れた飛天の奏でる優美な音楽が、見るものの感動を誘います。



■所在地  
〒630-8563 奈良市西ノ京町457  
TEL.0742-33-6001  
■交通  
近鉄西ノ京駅から徒歩すぐ  
駐車場有(100台・有料)

## 入江泰吉

1905年〜1992年。  
奈良市生まれ。  
写真家。



入江泰吉はおよそ半世紀にわたり、奈良・大和路の風景を撮影し続け、日本人の心の琴線にふれる作品を残しました。撮影に親しむようになったきっかけは、兄から譲り受けた一台のカメラだったといえます。その後、大阪で写真店を開業し、商品写真や自宅が全焼してしまい、入江は故郷の奈良に戻ってくるのです。

亀井勝一郎の『大和古寺風物誌』の影響を受けて奈良の古寺を訪ね歩いた入江は、仏像を撮影するようになり、次第に奈良の風景や伝統行事も撮るようになっていきました。彼は、「日本人の心のふるさと」といわれる奈良の風景を、詩情豊かに写真に表現し続けたのです。

第2次世界大戦以降から撮り続けられた作品は、芸術的な美しさはもちろん、当時の奈良を知る記録としても貴重なものです。86歳で亡くなるまで、奈良の仏像、風景、伝統行事などを撮影し、大和路を独自の世界観で記録し続けました。初めての個人作品集は『大和路』で、1958年に小林秀雄の勧めで刊行されました。このほか、『古色大和路』『萬葉大和路』『花大和』の3部作で、菊池寛賞を受賞しました。

およそ8万点におよぶ彼の作品は、入江泰吉記念奈良市写真美術館に保存・展示されています。

## 入江泰吉記念

## 奈良市写真美術館

入江作品を中核に、奈良ゆかりの作品を収集展示する写真芸術の情報発信地。



入江泰吉の手元にあった8万点もの作品は、生前すべて奈良市に寄贈されていました。1992年4月、その作品の公開と保存を目的にオープンしたのが「奈良市写真美術館」です（2007年改称）。設計は建築家の黒川紀章。天平建築を思わせる伸びやかな大屋根と、明るいガラス張りのエントランスが特徴的です。建物の横には大きな池が設けられ、さらさらと輝く水が外壁に反射します。

収蔵されている入江作品は、芸術性もとより失われた奈良大和路の風景を残す貴重な資料です。美術館では入江作品以外にも自然や歴史を対象とした作品、奈良ゆかりの作家の作品の展示や古写真の収集、若手発掘に努めています。



入江泰吉作品「親子鹿」



■所在地  
〒630-8301 奈良市高畑町600-1  
TEL.0742-22-9811

■交通  
JR・近鉄奈良駅から市内循環バスで破石町下車、東へ徒歩600m  
駐車場有(39台・最初の1時間は無料、以降は有料)

# 志賀直哉



1883年～1971年。  
宮城県石巻生まれ。  
大正・昭和期の白樺派の代表的作家。

志賀直哉は武者小路実篤らと文芸誌「白樺」を創刊し、白樺派を代表する作家です。

奈良市高畑町にある志賀直哉旧居は、彼が1929年から1938年にかけて暮らした住まいです。京都から奈良に住まいを移す際に、志賀は春日大社に近い静かな環境の高畑を選びました。その2階客間からは、若草山などが望め、2階の和室で代表作『暗夜行路』が書かれたと言われています。

奈良に住んでいた期間は、作家としても充実し、生活も安定した日々でした。妻と6人の子どもたちとともに育んだ思い出も多く、のちに彼は奈良に関連する作品を集めて限定本『奈良』を出しているほどです。

そんな志賀の住まいには、作家武者小路実篤をはじめ、画家や写真家、作曲家などの多くの芸術家が集いました。奈良・高畑で文学や芸術論が熱く交わされたのです。現在の高畑界隈は、閑静な雰囲気と春日山の緑を求めて散策する観光客も多く、志賀が住んでいた時代と変わらぬ雰囲気が残っています。その一角に、今も志賀直哉旧居は残されています。

小説家としてはもちろんですが、古都奈良での志賀は、古刹を訪ね、美術の研究にも熱心でした。芸術と家族にたっぷりの愛情を注いだ奈良での日々。懐深い奈良ならではの魅力は、志賀の創作活動に影響を与えました。

# 志賀直哉旧居



静かな高畑界隈の住宅街に、大正時代のモダンな雰囲気を漂わせる館。

生涯28回も転居をくり返した志賀直哉は、奈良で9年を過ごしました。

1929年4月に竣工した建物は直哉自身が設計したといわれる和風、洋風、中国風折衷のスタイル。茶室を備え、天井は葦張りにするなど、全体として和風数寄屋造りを基調としながら洋風の食堂兼娯楽室やサンルームも付加されたものでした。京都の宮大工によって建てられたこの旧居の書斎は、一切の無駄のない簡素なものの。借景に若草山を望む静かな環境で執筆活動をしていた姿が思い浮かべられます。

高畑一带は春日大社神官たちの住まいも多い屋敷町。古い邸宅跡の土塀や古木が、独特の雰囲気を醸し出す風光明媚な土地です。春日の杜と調和した風情あるこの館を愛した文人画家も多く、高畑サロンとして大いに賑わったのです。



■所在地  
〒630-8301 奈良市高畑大道町 1237-2  
TEL.0742-26-6490  
■交通  
JR・近鉄奈良駅から市内循環バスで約10分、破石町下車、東へ徒歩400m  
駐車場無  
(近隣県営駐車場160台・有料)

# 正岡子規

1867年～1902年。

伊予国温泉郡藤原新町（現・愛媛県松山市）

愛媛県松山市生まれ。俳人・歌人。



(財) 日本近代文学館蔵

彼の志望はその後、哲学者や小説家と変わっていきませんが、結局は俳人として名をなしたのでした。

子規が詠んだ俳句は約2万、短歌は2400首にのほります。そのなかに、冒頭の句があります。これは彼が初めて奈良を旅行したときに詠んだものです。当時、日本新聞社の記者として日清戦争の取材をしていた子規は結核にかかり、帰国途中に大咯血して須磨で保養生活を送っていました。見舞いに訪れた画家の中村不折は、帰りに立ち寄った奈良への憧れは膨らみ、体調がよくなつてきました。次第に子規の奈良への憧れは膨らみ、体調がよくなつて東京へ戻る途中、念願の奈良に立ち寄ったのです。子規28歳の秋、10月のことでした。

万全な体調ではなかった子規ですが、奈良の秋を堪能したのでしよう。彼は奈良を詠んだいくつかの句を残しています。旅先で出会った印象的な女性、つややかな柿、遠くで聞こえる東大寺の鐘の音。奈良で詠まれた句はどれも、憧れの地で過ごす子規の喜びを生き生きと表現しています。

柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺

奈良を詠んだ句で最も知られているのは、正岡子規のこの句ではないでしょうか。子規は松山市に生まれませんでした。政治家を志して上京し、当時流行りの野球の捕手として活躍もします。

# 子規の庭

奈良に憧れた俳人・正岡子規の思いを写した、美しい日本情緒ただよ庭。

秋暮る、奈良の旅籠や柿の味

初めて奈良を訪れた子規。子規が宿泊した老舗旅館の跡地に、関係者の尽力によってこの「子規の庭」は造られました。子規の好きだった柿の古木や草花で、庭は彩られています。

子規は「筆まかせ」という随筆の中で、自らが理想とする書斎と庭園を書き残しています。庭については「秋の野草を植え、野性的で乱れた中に、日本的な風雅であるもの」として、簡単な設計図まで記されていました。その記述を元に作庭されたもので、当時から残っていた柿の古木を庭の中心に植え替え、竹垣を巡らし、句碑は自然に馴染むように配置されました。後方には、子規も見たであろう東大寺大仏殿と若草山が借景として取り込まれています。



■所在地  
〒630-8207 奈良市今小路町45-1  
日本料理 天平倶楽部内  
TEL.0742-27-7272

■交通  
JR・近鉄奈良駅から青山住宅行  
きバスで約8分、今小路下車すぐ  
駐車場有(70台・無料)

# 柳澤吉里



1687年〜1745年。  
甲府から大和郡山へ移ってきた大名。  
文人。

大和郡山市は金魚の養殖地として知られています。毎年夏に開催される全国金魚すくい選手権大会には、県内外から多くの参加者が集まっています。大和郡山の金魚の歴史は古く、諸説ありますが、1724年に甲府から郡山に入城してきた柳澤吉里の時代に始まったと言われています。吉里の家臣である横田又兵衛が観賞用に持ち込んだのが最初とされます。

柳澤吉里は、1709年に父の家督を継いで甲府城主となりました。そしてその後、大和郡山への国替えの命により郡山城へ入部。その際に吉里は養蚕を持ちこみこれを奨励するなど、経済振興のために尽くしました。また、吉里は文人としても知られています。画人伝に名を連ねる一方、連歌や俳諧は約2万首が残されています。

柳澤家はその後明治維新まで6代にわたって郡山藩政を行いました。吉里が郡山城に入った際には、家臣とその家族5000人以上とともに移住したため、現在も大和郡山市には甲斐を故郷に持つ人が多いそうです。城内町には、柳澤家から土地と旧郡山藩の資料の寄付を受けて設立された「柳沢文庫」があり、郡山城址の管理整備、資料の整理保存、研究が行われています。

平成4年1月22日、大和郡山市と甲府市は姉妹都市となりました。吉里からの縁が、離れた2つの街を今もつないでいます。

# 郡山城



織田信長が命じ、筒井順慶が築城し、豊臣秀長が改築した、奈良では珍しい平城。

別名「犬伏城」とも呼ばれる郡山城は、織田信長が大和唯一の城とするため、筒井順慶に築かせたものです。豊臣秀長入城後は、紀州根来寺の大門を運ばせるなど城郭造りを進め、1724年に柳澤吉里が甲府から城主としてやってきました。深い内堀の北側には本丸・天守閣・毘沙門曲輪などの跡があり、堀を隔てた西側にキリン郭跡が残っています。墓石や石塔などの転用石が多い石垣は必見。野面積みの天守台には「逆さ地蔵」や多くの石仏が積み込まれています。

毘沙門曲輪には吉里自筆の絵も所蔵する柳沢文庫があり、本丸跡には柳澤神社が祀られています。蕉門十哲の一人、森川許六は、「菜の花の中に城あり郡山」の句を詠んでいます。春、城址一带は花見客で賑わいます。



柳澤吉里筆 柳沢文庫蔵



■所在地  
〒639-1011 大和郡山市城内町  
TEL.0743-52-2010  
(大和郡山市観光協会)  
■交通  
近鉄郡山駅から徒歩200m  
駐車場有(10台・無料)

## 片桐貞昌

1605年〜1673年。  
撰津国茨木（現・大阪府）生まれ。  
近世前期の大名。茶匠。



片桐貞昌は撰津に生まれました。彼は、秀吉に仕え1583年の賤ヶ岳の戦いで七本槍の一人として勇名を馳せた片桐且元の甥にあたります。1624年、石見守に任ぜられたことにより、石州とも呼ばれています。

且元の死後、大和の小泉に移封された父に伴い奈良に移りました。1627年、亡き父から大和小泉1万6400石を受け継ぎ藩主となります。その後、幕府の命により徳川家菩提所である京都東山知恩院の作事奉行、関東の郡奉行などを勤めました。

また、茶人としては石州流の流祖として知られています。石州流は千利休の長男・千道安の流れをくむ流派で、利休の侘びの精神を受け継ぎつつ、質実剛健の中に優雅さを含んだ武家らしい茶の世界を広めました。武士中心の社会に調和した「分相應の茶」であったことから、將軍家をはじめとする諸大名たちに好まれたようです。1665年には、徳川4代將軍家綱の茶の湯の指南役も務めました。石州が残した「茶湯さびたるは吉」とは、「茶の湯では自然と古びたものこそよい」とする意味で、有名な言葉です。

大和郡山市にある慈光院は、石州が父の菩提寺として建立した寺で、茶室や庭園に石州の美意識が現れています。このほか、葛城市の當麻寺中之坊にある大きな円窓が印象的な茶室「丸窓席」も手掛けました。

## 慈光院

隅々まで行き届いたさりげない演出、しっとりとした落ち着くもてなしの空間。

慈光院は雨の日は美しい。門を入れば、進むに従って、慈光院のもつ空気の中に取り込まれていくようです。

ここは大和三名園の一つに数えられ、国名勝・国史跡の指定を受けています。多くの重要文化財を持ち、隅々まで手入れの行き届いた美しい姿を見ることが出来ます。

貞昌はこの場所を多くの客人をもてなし、茶をいただき、心豊かに過ごせる場所として考えていました。歩きながら院内を巡れば、その練りに練られた美を、そこかしこに感じる事ができます。一服の茶が、心の豊かさを与えてくれるように、この場所のすべてが、客人をもてなす空間として存在していることを感じる事ができます。



■所在地  
〒639-1042 大和郡山市小泉町865  
TEL.0743-53-3004  
■交通  
近鉄郡山駅から法隆寺行きバスで約10分、片桐西小学校下車、徒歩200m  
駐車場有(25台・無料)